

## M・クラペズ『反動的左翼』

松尾, 剛

<https://doi.org/10.15017/10016>

---

出版情報 : Stella. 18, pp.225-228, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## M・クラペズ『反動的左翼』

松尾 剛

ゼーヴ・ステルネルは『革命的右翼』（1978年）においてファシズムの思想的起源は19世紀末のフランスにあると主張した<sup>1)</sup>。前世紀末には、科学・理性・進歩・自由意志といった近代的価値に、非合理・本能・無意識・決定論を対置し、リベラルな民主主義への異議申立をおこなう右翼が現れたのである。この新たな右翼たちは、個人主義や議会制度を嫌悪し、大資本を攻撃することで、ブルジョワ社会に反抗したのだった。これにたいし社会主義者たちは第3共和制を擁護する側にまわらざるをえない。畢竟19世紀末の社会状況のなかでは、新しい右翼たちこそが〈革命的〉だったのである。彼らは経済的不満をもつ大衆の動員に成功したばかりでなく、現体制の破壊を望む極左をも吸収していった。そしてこの〈革命〉の名の下におこなわれた極右と極左の結合にこそ、ファシズムの起源はある——以上がステルネルの分析である。彼の研究は刺激的なものであった。フランスにはファシズムなど存在しなかったとする通念の再検討を迫ったのである。

本書『反動的左翼——啓蒙の航跡における民衆と人種の神話』（1997年）は、上記の主張のいわば補完を目的としているといっていよう<sup>2)</sup>。著者マルク・クラペズは1969年生まれの30歳。人種主義の研究者として名高いピエール＝アンドレ・タギエフがこれに序を寄せている。

さて、クラペズは『革命的右翼』におけるステルネルの主張を認めたくうえで、さらにこの系譜を遡ろうとする。果たして世紀末の右翼は大革命以降の政治思想の奈辺に位置づけられるのであろうか。

そこで著者が注目するのが、『ペール・デュシェーヌ』の名を冠した19世紀の定期刊行誌群である。この時代には20種近くの『ペール・デュシェーヌ』が現れている。いうまでもなくその誌名は、ジャック＝ルネ・エベールが大革命下に発行した同名の新聞に由来している。もちろんエベールから受け継がれ

たのは誌名だけではない。彼の嘲弄的な文体、無神論、愛国主義、平等主義もまた脈々と継承されていったのである。俗語を駆使した野卑な文体はその言葉を使う民衆 *la plèbe* への信頼に由来し、徹底した無神論は唯物論に立脚していた。くわえてこの無神論は、愛国主義と結合することで反キリスト教思想を産み出すことになる。つまり司祭たちが否定されるべきなのは、神などという非合理的なものを信じているから、というだけではない。彼らはローマ法王を主人とするがゆえに祖国を愛さぬ者たちでもあるからなのだ。さらにはその平等主義——19世紀エベール派の人間たちは、発達してゆく産業社会からとり残された民衆のために、平等への権利を要求した。ただしここで留意すべきなのは、彼らの平等主義はけっして共産主義的な、私有財産制を否定する思想ではなく、特権的に消費を享楽する資本家を否定し、可能な限り多くの人間が利益を享受できるように、と求めるものだったことである（これをクラベズはサン＝キュロット主義と呼ぶ）。かくして彼らの主張は社会主義的な相貌を帯びてゆく。

つづく第2部では、第2帝政・第3共和制下の反キリスト教思想が詳細に検討されてゆく。19世紀エベール派における反キリスト教思想の支柱となったのは、先に述べたように唯物論であった。人間を自然の歯車とする決定論のドルバック、人種・環境・時代という因子により人間が決定されるとするテース、心身二元論を否定し、精神的なものも含め、すべては物質からの派生物にすぎないとする一元論のルードヴィヒ・ビュヒナー<sup>3)</sup>、そしてダーウィニズム。これらの思想に支えられて、エベール派の反キリスト教主義は強固なものとなっていった。だがこの反キリスト教主義は反ユダヤ主義を招きよせてしまう。強力な無神論ゆえにキリスト教を徹底して嫌悪する彼らは、キリスト教の母胎となったユダヤ教とユダヤ人をも憎悪しはじめたのである。かくしてエベール派は、反キリスト教的反ユダヤ主義を奉じるようになった。

ところで私見によれば、本書のユニークさのひとつは、近代反ユダヤ主義の基盤を唯物論的無神論に求めたところにある。というのも従来、反ユダヤ主義は中世以来のキリスト教的なものか、近代以降の社会主義的なものか、そのどちらかの形態でのみ論じられがちだったからだ。著者の強調する反キリスト教的要素が、今後の反ユダヤ主義研究に新たな視点をもたらすことは間違いあるまい。

ともあれ、平等・反キリスト教・愛国主義を唱えるエベール派の人間たちは、世紀末にはより過激な主張を展開するようになる。その軌跡が描かれるのが第3部である。彼らは平等主義ゆえに大資本の追放を、反キリスト教主義ゆえに反ユダヤ主義を、愛国主義ゆえに外国人労働者の排斥を主張した。ここでクラベズは、世紀末のエベール派が社会主義的反ユダヤ主義を政治的道具として用い始めたことを指摘している。すなわち、エベール派の反キリスト教的反ユダヤ主義はあくまで理念的なものであるため、民衆への訴求力をもちえない。そこでユダヤ人を大資本の象徴と見なす社会主義的反ユダヤ主義がクローズアップされることになったのだ。これならば労働者にも受け入れられる、というわけである。

かくして形成された戦闘的平等主義、反ユダヤ主義、排外的愛国主義を、クラベズは社会主義的排外主義 *le social-chauvinisme* と呼ぶ。つまりエベール派の元来もっていたサン＝キュロット主義が、世紀末には社会主義的排外主義へと過激化してしまった、と分析するのだ。この運動は、ブーランジスムからドレフュス事件に到るなかで頂点に達する。だがそれはまた、社会主義的排外主義の終焉を告げるものでもあった。というのもブーランジスムとドレフュス事件のなかで彼らは、民主主義的共和制か、反動的ナショナリズムかの二者択一を余儀なくされたのだ。前者を選択すれば排外主義や反ユダヤ主義を、後者を選択すれば平等主義や無神論を放棄せざるをえないエベール派の主張は、分裂の危機にさらされてしまったのである。結果として彼らの多くは後者に吸収され、革命的右翼となっていった……。

これが「反動的左翼」と著者の名づける思潮の隆替である。革命的右翼に吸収されたはずのこの思想だが、しかし20世紀になって最後の信奉者が現れた。セリーヌである。暴力的な文体で反ユダヤ・反キリスト教・平等主義・人種主義を唱えるセリーヌの思想は反動的左翼のものであり、彼はまさしくエベールの末裔であるとする著者の主張は、強い説得力をもつ。今後セリーヌの思想を論じようとする者にとって本書は必須文献となるのではないだろうか。

以上、クラベズの主張をまとめてみた。本書の意義は何よりもまず、反キリスト教的反ユダヤ主義の重要性を強調したところにある。が、もちろんそれだけではない。タギエフの言うように、19世紀エベール派という、従来ほとんど注目されることのなかった政治運動を、未刊資料をもって分析したこともま

た高く評価されるべきである。一つひとつの歴史的概念を扱う手続きが慎重なのも素晴らしい。たとえば、サン＝キュロット主義とナショナル＝ポピュリズムの差異を明示しつつ論述を進めてゆくその手腕は、政治思想史のような錯綜した事象を追跡するさいには不可欠なものであろう。

ただし厳密な概念分析が、若干本書を読みにくいものになっているということはあるかもしれない。つまり、それぞれの歴史概念の定義を読者がしっかり把握していないと、論旨を見失ってしまいかねないのだ。また著者の視線が資料の細部にまで行きとどいているぶん、論述がけって直線的でないことも本書のスムーズな理解を困難にしているといえよう。だが、これは著書としての欠陥とはいえない。厳密な分析は、可能な限り精確に歴史を再構成しようとする者にとって当然の義務であるはずだ。むしろセリーヌへと到るファシズムの系譜を明らかにした、その緻密な調査と説得力に満ちた論述を積極的に評価すべきではないか。ステルネルやベルナル＝アンリ・レヴィに代表されるファシズム研究がしばしば資料読解の粗雑さや単純さを批判されるだけに、本書の意義はかぎりなく大きい。われわれとしては若き俊英の登場を素直に喜ぶべきであらう。

## 註

- 1) Zeev STERNHELL, *La Droite révolutionnaire. Les Origines françaises du fascisme (1885-1914)*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Points / Histoire», 1978.
- 2) Marc CRAPEZ, *La Gauche réactionnaire. Mythes de la plèbe et de la race dans le sillage des Lumières*, Paris: Berg International Éditeurs, coll. «Pensée politique et Sciences sociales», 1997.
- 3) ルードヴィヒ・ビュヒナーは作家ゲオルクの弟であり、本書91頁がゲオルクの息子とするのはあきらかな誤謬。